

生徒のコミュニケーション能力を高める「ボディパーカッション教育」の展望：特別支援教育発展の手がかりとして

山田, 俊之
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/15580>

出版情報：飛梅論集. 9, pp.109-129, 2009-03-31. Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



生徒のコミュニケーション能力を高める 「ボディパーカッション教育」の展望

—特別支援教育発展の手がかりとして—

山 田 俊 之*

1 はじめに

「特別支援教育」になると、さまざまな支援を必要とする生徒達が、ひとつの教室の中で、ともに学ぶ機会が増えてくる。文部科学省は「これまでの『特殊教育』では、(中略)特別な場で指導を行うことにより、手厚くきめ細かい教育を行うことに重点が置かれてきた。『特別支援教育』とは、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。」¹⁾と述べている。

また、中央教育審議会生涯学習分科会で大宮登は「コミュニケーション能力の欠如は、今日的な社会構造をもたらす社会的な課題なのである。いじめ、学級崩壊、児童虐待、キレる子たち、不登校、引きこもり等の生徒たちをめぐる深刻な状況の根本原因は、双方向的なコミュニケーション能力が弱い人たちを生み出す根本原因と同じなのである。」²⁾と述べている。具体的要因として生徒の学力・気力・体力の低下傾向、発達障害児の対応など様々な実体験の減少に伴う社会性やコミュニケーション能力等の不足と考える。さらには、このような状況を生み出す背景には、通常学級の中に特別支援が必要なADHD(注意欠陥多動性障害)、アスペルガー症候群、高機能自閉症、LD(学習障害)などの発達障害に該当する児童生徒の存在を認識しなければならない現状がある。

平成20年3月に小・中学校学習指導要領が告示された。現行学習指導要領の理念である「生きる力」は不変であるが、コミュニケーション能力の基盤である言語活動は重要な要素になっている。そのことについて、中央教育審議会委員である八尾坂修は「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く枢要な改善の視点である。言語は『知的活動(論理や思考)』だけでなく、『コミュニケーションや感性・情緒』の基盤である。(中略)それゆえ各教科等においては、国語科で培った能力を基本に『知的活動』や『コミュニケーションや感性・情緒』の観点から、例えば以下の点を適用できる。(中略)エ.音楽、体育等において、合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体表現(例:ボディ・パーカッション)などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする。」³⁾と述べており、ボディパーカッションがコミュニケーション能力を培

*九州大学大学院博士後期課程

う身体表現として取り上げられている。

そのような中で、健常児も含めてどの子にとっても、生徒同士が楽しく生き生きとコミュニケーションが取れる教材として特別支援学校（養護学校、聾学校）における「ボディパーカッション教育」（リズム身体表現活動）の実践事例を取り上げその有効性を検証したい。

本稿ではまず第一に、特別支援教育と非言語コミュニケーションの重要性を述べ、ボディパーカッション教育との関連や特別支援教育における教師のコミュニケーション能力についても考えてみたい。次に、実践事例として筆者の特別支援教育現場での過去10年間の取り組みについて、養護学校（知的障害、肢体不自由）2例、聾学校（聴覚障害）1例の授業実践を取り上げる。以上の実践から、特別支援教育における生徒のコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の展望を見出したい。

最後に、神奈川県教育センターで行った「体験して学ぶボディパーカッション教育」研修会のアンケート集計結果を基に、ボディパーカッション教育に対して客観的な検証を行い、特別支援教育でボディパーカッション教育の活用が望まれており、特別支援を必要とする生徒のコミュニケーション能力を培うためにも有効であることを検証したい。

2 特別支援教育と非言語コミュニケーション

言葉や文字での指導や説明が、健常者に比べて困難な特別支援教育（主に発達障害）の現場での生徒同士のコミュニケーションは大変難しい場合がある。また、聴覚障害の生徒同士のコミュニケーションは、手話や口話又は筆談などの文字言語を媒体とした会話は可能であるが、使われる語彙や言葉の難易度によっては相手に自分の想いを正確に伝えることが難しい。その時、大きな力を発揮したのが非言語コミュニケーションであった。

生徒のコミュニケーション能力は、相手に言葉だけではなく感情が同時に伝わる必要がある。生徒達は会話（言語）で伝達する以外に、相手の顔の表情、声の調子、相手の身振り手振り、そしてその場の状況や雰囲気を瞬時に読みとることで、相手とのコミュニケーションを会話以外の要素で補完しながら進めていき信頼関係が生まれていく。そこには、非言語コミュニケーションの占める割合は大きい。

非言語コミュニケーション研究のリーダーの一人、レイ・L・バードウィステルは、対人コミュニケーションをつぎのように分析している。「二者間の対話では、言葉によって伝えられるメッセージ（コミュニケーションの内容）は、全体の35%程度にすぎず、残りの65%は、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間のとり方など、言葉以外の手段によって伝えられる」⁴⁾と述べている。この研究分析が示唆しているのは、非言語コミュニケーション能力の重要性である。

特別支援教育の現場では、文字・言語によるコミュニケーションよりは身体表現における非言語コミュニケーションである生徒の顔の表情、身振り手振りから相手の気持ちを察することが多い。また、通常学級の中にも特別支援が必要なADHD（注意欠陥多動性障害）、アスペルガー症候群、

高機能自閉症、LD（学習障害）などの発達障害に該当する児童生徒の存在がある。そこで、養護学校（知的障害）、聾学校（聾学校）での実践例を通し、特別支援が必要な生徒のコミュニケーション能力を高める方法としてボディパーカッション教育を試み、教育的効果の検証・考察およびその必要性を考えてみたい。

3 特別支援教育とボディパーカッション教育

特別支援教育の推進について「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている。」⁵⁾と通知されている。これからの学校教育において共生社会の基礎となる教育理念と捉えている。そのためにも、障害の有無や個々の違いに拘わらず共生社会を構築するために生徒のコミュニケーション能力を高めることは喫緊の教育課題であると考ええる。

2007年の文部科学省報告で『東京都江東区で、現在最も多い学習支援講師派遣内容は発達障害によると思われる学習困難に対する支援である。』⁶⁾とある。今後この傾向は、全国的に広がっていくと思われる。柔軟に考えれば、特徴ある個性的な生徒たちが一つの教室で共に生活をしていく。具体的には、同じ教室の中で足が速い遅い、計算が速い遅い、歌や楽器演奏が得意、苦手、水泳が得意、苦手、うまく人と話せない、また発達障害に関しても自己表現が苦手（自閉症）、教科書が読めない（学習障害）、授業中歩き回る（ADHD）、教室からいなくなる（ADHD）、会話が合わない（アスペルガー症候群）、授業に集中できない（アスペルガー症候群）、予定が変わると不安（自閉症）、言葉が出ない（聴覚障害）、体が自由に動かせない（肢体不自由）など特徴的な症状がある。このようなさまざまな個性を持った生徒達と共に生きる社会を創り上げるという考え方が必要になってくる。

ボディパーカッション教育は、1986年（昭和61年）、筆者が福岡県久留米市内の小学校4年生を担当し、友達の輪の中に入りにくい、所謂「よくキレるタイプ」の男の子（以下A男と表記）を中心に行った学級活動をきっかけに、生徒のコミュニケーション能力を高める教材として取り組み、学級経営の一環として行った学級活動や特別活動から始まった。現在であれば、A男は社会性に課題がある生徒としてADHDに該当していたと思われるが、当時を取り巻く教育環境の中では、ADHD、アスペルガー症候群、高機能自閉症、LD（学習障害）などの発達障害に対して適切な用語や指導方法がほとんど見あたらなかった。そこで、A男が参加できる内容で自らも参加意欲を持ち、自己表現を伴ってクラスの一員として所属意識を持ち、他の生徒とのコミュニケーションが感じられる教材として「ボディパーカッション教育」と名付けて試みた。

名称「ボディパーカッション」は生徒達が「体全部が太鼓になるね」からヒントを得て、当初（1986年11月）、「人間太鼓」と呼称していたが、生徒達が興味を示さず、1987年2月「ボディパーカッション」と変更し筆者が生徒達と一緒に考え名付けた造語である。具体的な取り組みとしては、言葉

だけではなく身体を使って手拍子、お腹を叩く、膝を打つ、足踏み、ジャンプ、お尻を叩くなど身体の様々な所を叩いてリズムや動作で表現し、グループや全体で合わせたり、即興的にアンサンブル（身体表現方法の様々な組み合わせ）を作り上げたりする活動である。

・ボディ…身体（body）、 ・パーカッション…打楽器の総称（percussion）

その後、1987年（昭和62年）より学校教育における、小学校の担任として学級活動、音楽科、特別活動、また1996年に養護学校での勤務以来、特別支援教育（知的障害、聴覚障害）の分野でも「生徒のコミュニケーション能力を高める教育」をテーマに継続して行ってきた。

特別支援教育における生徒のコミュニケーション能力とは何か、それは、言葉や文字で意味を伝えること以外に、顔の表情、声の調子、身振り手振りなどで、相手に気持ちを伝達する力だと考えている。生徒の同士の会話では、お互いに言葉の語彙力や理解力に未発達の場合が考えられる、よって自分の気持ちを伝えるために相手に言葉の意味だけではなく、感情を同時に伝えるために言葉ではない方法（非言語・ノンバーバル）でコミュニケーションを補完し伝えることが必要である。

特別支援が必要な生徒同士では言葉を交わさず顔の表情や、身振り手振りなどでコミュニケーションを取っている場合も多くみられる。そこで、ボディパーカッション教育を取り入れた身体表現活動に取り組み、一つの表現発表が完成に近づく過程で、生徒同士の身体表現活動を通した非言語（ノンバーバル）を含めたコミュニケーション活動によって仲間として一体感や達成感などが得られると考えた。特別支援教育における「コミュニケーション能力」とは、自己表現する力であり、自分の思いや願いを相手に伝える力であると考えている。

4 特別支援教育と教師のコミュニケーション能力

特別支援教育が必要な教育現場では、教師のコミュニケーション能力は生徒のコミュニケーション能力を高めることと全く無関係ではない。特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものである。

そこで、特別支援を必要とする児童・生徒の対応は教師個人の力量だけに頼るのではなく、スクールリーダーである校長を中心に組織的対応が必要となる。具体的には当該児童生徒の個別の支援計画、保護者対応、医学的ケア、など教師個人では多面的な対応が難しいケースがあり、クラス担任教師と管理職、学年主任、同学年の同僚教師とのコミュニケーションがスムーズに行われなければならない。その為にも、教師自身のコミュニケーション能力向上は喫緊の課題となっている。

特に、特別支援を必要とする児童・生徒の場合は教師自身が実際にお手本を提示し、各教師同士の協働体制が必要になり、今まで以上に教師のコミュニケーション能力の向上や研修が求められる。八尾坂の論文でも「教師の力量も養成・採用・研修の各ステージを通じて、生涯にわたり形成されていくことがこれからの時代により一層求められてくる。（中略）教職は、人間の心身の発達にかかわる専門的職業であり、その活動は生徒たちの人格形成に大きな影響を与えがちである。」⁷⁾と

あり、近年生徒の変化等を背景に学校教育が抱える特別支援を必要とする教育課題は、複雑かつ多様になっている。このことは、筆者自身が、現職の教師として小学校や特別支援学校（養護学校、聾学校）で指導経験する中から痛切に感じている。ボディパーカッション教育は、生徒とともに教師自らが一緒に体験しながら生徒とのコミュニケーションを取れる教材である。

これからの教師は中教審の答申にもあるように「小中学校において通常の学級に在籍するLD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒に対する指導及び支援が喫緊の課題になっており、『特別支援教育』においては、特殊教育の対象になっている幼児児童生徒に加え、これらの児童生徒に対しても適切な指導及び必要な支援を行うものである。」⁸⁾という現実直面している。現在の教育現場は、いじめ、不登校、校内暴力等の学校病理問題の依然とした深刻化、そして発達障害児を含めたキレる生徒たちの新たな現象が生まれていると言える。

特別支援を必要とする児童生徒の取り組みは、学校全体の取り組みとして全職員に対してスムーズな情報提供を行い、担任教師と特別支援教室担任とのスムーズな連携を図れる教育的環境を整えることが重要なポイントになってくる。そのためには、学校全体が組織的な対応をできるようにスクールリーダーである校長と副校長、教頭、ミドルリーダーである主幹教諭、指導教諭と学年主任、担任教師、特別支援教室担当教諭との連携は各教師のコミュニケーション能力に負うところが大きい。

5 実践ケースからの成果の方向性

(1) 養護学校での実践ケース I ⁹⁾

① 生徒の自己表現能力、コミュニケーション能力を培う取り組み

1996年（平成8年）6月～10月、筆者は久留米養護学校高等部生徒36名を対象にボディパーカッション教育に取り組んだ。養護学校の生徒はリズムのある音楽を聞いたりそれに合わせて身体を動かしたりすることに、大変興味・関心を持っている。ボディパーカッション教育を行うことにより、情緒や情動の安定を促し、生徒自身が自己表現をできる力を身につけ、生徒のコミュニケーション能力を培う取り組みを行った。

具体的には、ボディパーカッション曲「花火」（山田俊之 作曲）¹⁰⁾を題材に授業（生活単元、学級活動、音楽）を行った。そして、同じ平成8年10月の養護学校高等部文化祭の表現プログラムにボディパーカッション曲「花火」を発表するという目標を持って取り組んだ。このときの大きな目的は、自己表現できる楽しみや生徒同士のコミュニケーション活動を活発にし、学校生活に積極的に参加できる意欲を促すことであった。

その時指導した生徒の主な症状は自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、ダウン症、脳性まひ、軽度発達障害、肢体不自由を含む重複障害等である。指導は、授業が始まる前の朝の会、教科では生活単元の時間、音楽科の時間などを使って、授業の中でボディパーカッション教育を取り入れた。

その時の具体的な指導内容は、同じ表現パターンをいくつかのグループに分け、等間隔に長さを遅らせ、同じ表現を重ね合わせる手法を取り入れた¹¹⁾。この表現形式は、グループで同じ表現方法を用いることで仲間意識やグループの所属意識が育つことをねらいとしている。

さらには、同じグループ内で手拍子を打つ音が少しずれても、そのずれた音が打楽器奏法の装飾的（フラム打ち）な意味合いを持たせることで、少しずれた音でも、その音の厚みを効果的に活用した。また、脳性まひのため車椅子に乗っており、話すことや自分で食べることが出来ない生徒にも同時に指導を行った。同僚の教師と協力してその生徒の手を取り、手拍子を打つ、おなかを叩く、膝を叩くなど体に刺激を与え生徒自身が喜ぶことを行いグループの仲間として所属感を持たせた。

健常児と同じように体を動かし、リズムの拍の流れに乗って演奏することは大変難しい状況の生徒、車椅子に乗って脳性マヒで話すことや自分で食べることが出来ない生徒もいる。そんな中で、ボディパーカッション教育がどれだけ効果があるかは未知数であった。文化祭に向けて一緒に指導している高等部の教職員集団と数回の協議の結果、次のような方針で指導を行うことになった。

- ア 同じ動作を繰り返し行う。
- イ 声を出し、笑顔があれば参加していると見る。
- ウ 体が他の生徒と同じように同調する動きがあればよい。
- エ 脳性麻痺の生徒は教師が手を持ってからだを刺激すればそれはその生徒にとっての表現方法であると認識する。
- オ 日頃より真剣に取り組む様子があれば楽しんでいる。
- カ 手を打つ動作、動かす動作が入れば参加していると見る。

上記の基準は、今までの健常児における小学校生徒の基準とまったく違うものであった。まず取り組んだのは、「手を打つ」「膝を叩く」「おなかを叩く」といった、簡単な動作からだったが、なかなか順調には進まない。何度も何度も同じ動作を繰り返して指導するが、「同じ動作を繰り返す」という動作すら、できないことも日常的だった。「障害がある生徒にとってのボディパーカッション教育とは何か」「自己表現活動とは何か」「リズムを同調させ楽しむとは何か」を考え直した。健常児におけるボディパーカッション教育は、「生徒たちが楽しむ」という部分とそれを客観的に作品にして表現し「見せる」という部分が共存している。しかし、養護学校におけるボディパーカッション教育はそうではない。養護学校には、全面介助（全面介助とは、介助者が食事等の摂取を全面的に介助し排泄物を処理すること）の生徒もいる「見せる身体表現」ではなく、「その子自身が純粋に楽しむ身体表現」でなければならないと考えた。そこで、ボディパーカッション教育の特別支援における考え方を下記のように考えた。そして、具体的な方法として次の5点に取り組んだ。

- ア 手を打つ、膝を叩く、おなかを叩くという簡単な動作から始める。
- イ 何度も同じことを繰り返し体感させる。
- ウ 養護学校でのボディパーカッション教育の取り組みは、客観的に見せる表現ではなく、その生徒自身が楽しむ自己表現と考える。
- エ 全面介助の生徒には、教師が手を取り、手拍子、おなか、膝などに刺激を与え他の生徒

と同調していくそれが、その生徒にとっての自己表現活動と捉える。

オ 他の生徒と同調して打つことはしないが、飛び跳ねたり、気分が良いと手拍子を打ったりする生徒の場合は、それがその生徒にとっての自己表現活動と考える。

② 得られた知見

養護学校の生徒にとって、健常児と同じ様に体を動かしたりするのが難しい状態の生徒も多かったが、半数以上がリズムに同調して身体表現を行うことに積極的に取り組んだ。具体的な例としては、日頃、指をくわえたままでほとんど動かない女子生徒が、他の生徒が演奏する「花火」の曲に合わせて大きく飛び跳ねたり、立ち上がったたり、座ったりすることが苦手な男子生徒が、ほかの生徒に喚起されるように即座に立ちあがってリズム表現を行っていた。

特に、軽度発達障害、ダウン症の生徒は身体表現に対して敏感に反応し、進んで体を動かしていた。生徒自身が手拍子、足踏み、おなかや膝を打ち、体を刺激して表現するボディパーカッション教育は、自ら意欲的に取り組もうとする姿勢を内発的に誘発させる効果があった。

このことは、生徒の自己表現能力の自信となり、身体的な面にも活動的な好影響を及ぼしていくと思われる。素直に体を動かし嬉しさを全身で表現する生徒の姿が、他の生徒との関わりの中からコミュニケーション能力の育成に繋がると考える。

(2) 養護学校での実践ケースⅡ

① A子のコミュニケーション能力を養う視点から

2006年（平成18年）9月～12月、久留米養護学校高等部1年生徒で軽度発達障害のA子を中核にして授業を行った。A子は日常の簡単な会話はある程度理解できているが自分から進んで積極的に話すタイプではない。人前で話をしたり自ら積極的に手をあげたりすることは苦手であり、こちらが質問をすると言葉に詰まり黙ってしまうことが多い。時には、気分が乗らないと刹那的に教室から飛び出してしまう。そこで、A子のコミュニケーション能力育成を目的として、ボディパーカッション教育に取り組んだ。

目標は、12月に行う「校内発表会」「NHK交響楽団演奏会で共演」である。共演予定曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を通して友達と一緒にボディパーカッション教育を行うことで、A子のコミュニケーション能力を高め、協調性や積極的な姿勢を培いたいと考えた。

対象は久留米養護学校高等部1年A子を中核に、重複2名、単一12名の学年である。具体的内訳は自閉症、広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、ダウン症、脳性まひ、軽度発達障害、肢体不自由を含む重複障害等の生徒に行った。

A子は自ら同じクラスの生徒と話して、コミュニケーションを取ろうとする場面が少なく、休み時間も単独で行動することが多い。そこで、友達と一緒にボディパーカッション教育を行うことで、自ら身体活動を行い友達と活動する一体感を楽しみ、積極的に自己表現できる力を培う事を目的とした。本実践では、オーケストラ演奏「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」（NHK交響楽団トップメンバーがボディパーカッション共演のために演奏したCD、2001録音）に合わせてボディパーカッションの練習を行った。音楽に合わせて、リズムの楽しさや躍動感を味わい、友達との一体感

を感じながらボディパーカッション活動を行うことで、コミュニケーション活動に繋がると考えた。

② A子を含めた全体指導の工夫点

- ア 授業の導入部分でリズム遊びを用い、リズムの楽しさや面白さを感じさせ、関心を持たせる。
- イ 演奏曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を何回も聴き、その曲に対する意欲や表現する楽しさを喚起する。
- ウ 同年10月、高等部2年生が文化祭で行ったボディパーカッションの演奏映像を見ながら、CD（NHK交響楽団の演奏）に合わせて手拍子を打ち、体を動かすことを促す。
- エ 練習期間の後半では、手拍子で強弱の付け方も取り入れ、よりボディパーカッションに対して音楽的にも集中できるように配慮する。

実践IIでのボディパーカッション活動は、授業のまとめとして演奏発表を行う。授業の過程では、A子と同じ学年の生徒同士がコミュニケーションを取りながら身体活動ができる雰囲気作りを行うことで、A子が自己表現できる自信や喜び感じ、友だち同士で音楽に合わせて演奏する楽しさと、一体感を味わうことでコミュニケーション能力を高めることができるようにしたいと考えた。

③ 得られた知見

A子を含めて曲に合わせたリズムを打ち、友だち同士と合わせることの一体感を楽しむ。さらに、強弱にも気をつけ、3パターンのリズム打ちが表現できるようになった。自らリズムを打つてみたいと思うようになることで、友だちと一緒に練習を行い、リズムを通して生徒同士のコミュニケーションが取れ、友達と一緒に楽しむようになり、そのことが、実際に終業式で行う意見発表でのボディパーカッション演奏を想定し、意欲や自信に繋がった。

しかし、実際にリズムを打つことの楽しさを客観的に考えさせたいと考えていたが、他の人と一緒に合わせる手拍子の楽しさを味わい意欲を持つことの検証が難しかった。

養護学校の場合、その年によって障害の程度の違う生徒が入学してくる。ボディパーカッション活動も、どの程度できるかはその都度状況判断しなければならない。重複障害（知的障害と肢体不自由などが重なった障害）をもった生徒にとっては、ボディパーカッションは音楽療法に入るかもしれない。また、刺激を与えつづけるという意味では、養護訓練になるかもしれない。また、ある生徒にとっては、音楽というよりも体育の授業として行っているような感じを受けるかもしれない。感じ方、受け取り方、そして、その効果はそれぞれに違うのである。しかし、一番大切なことは「ボディパーカッションを通して、リズム身体活動や音を楽しんでいるか」ということである。

(3) 聾学校での実践ケース

① 指導上の課題と解決の視点

ボディパーカッション教育は、体を叩くアンサンブルによって健聴者（聴覚障害の立場から、健常者のことを健聴者と呼称することが多い。）と同じように聴覚障害者が一体感を感じながら、「音が聞こえなくても、身ぶりから感じる音があり、体をたたく振動で音は聞こえる」と考えた。そこで、「音の世界」から一番遠い位置にいる聴覚障害を持った聾学校の生徒に対して、ボディパーカッ

ション教育を取り入れて指導をする。それを一般の演奏会や全日本聾教育研究会で発表演奏することにより、『自己実現の場』を設定しコミュニケーション能力や積極性を増す効果を期待した。

対象は聾学校幼稚部・小学部・中学部の生徒約60名、時期は1997年（平成9年）1月～1998年10月である。援助・指導の経過として、聾学校では大きな動作を交えて口を大きく開けて説明しながらボディパーカッションを指導した。その時、生徒は筆者の口唇の動きを読み取りその横で同時に聾学校の教師が手話通訳を行った。

ボディパーカッションは聴覚障害があっても、自分で楽しんだり感じたりできるのではないかと直感した。耳が不自由でもボディパーカッションは自分の体を叩くのため、強弱もリズムも簡単にわかる。まわりの人の動きも見えるので、アンサンブルに問題はない。平成10年度全日本聾教育研究大会研究演奏指導の機会を得られ、ボディパーカッションの指導に取り組んだ。指導における問題点と解決点は以下のとおりである。

問題点

- ア 自分の叩く感覚はわかるが、生徒が他の生徒を見ていなければ少しずれてしまう。
- イ 筆者自身が手話や身振り手振りで内容や思いを伝えることができるか。
- ウ 聾学校の生徒達が、ボディパーカッション教育を楽しんでいるのか。

解決点

- ア 生徒達が筆者の口唇を読み取り、その横で同時に聾学校の教師が手話通訳を入れる。
- イ 聾学校音楽担当の教師が筆者の姿を見て、「もっと、普通に指導されて結構です。」の一言でいっきに肩の力が抜け、それからはなるべく分かりやすいように大きな動作で説明しながらゆっくり話すことを心掛けた。
- ウ 身振り手振りで大袈裟に説明しながら（手話になっていない動作）繰り返し、手や体を打つしぐさを行って伝えようとする。

② 得られた知見

聾学校では繰り返し練習を行った結果、難度の高いリズムが叩けるようになった。また、曲の後半には、生徒自身が考えた即興的な発表を取り入れて曲を構成するというような発展的な取り組みまででき予想以上の結果であった。通常、演奏会などを聞きに行くことができない聴覚障害者が、身体表現発表をすることにより、主役の立場になる。音が聞こえなくても、身ぶりから感じる“音”があるはず。体をたたく振動でも“音”は聞こえると考える。

③ 言葉の壁を越えるコミュニケーション能力の育成

聾学校の聴覚障害がある生徒達がボディパーカッション教育に取り組んだ例を挙げてみた。そこで、音を通じた自己表現からからいちばん遠い位置にあると思われる聴覚障害の生徒達が生き生きと取り組んでくれる様子が多く見られた。実践指導を行った結果、聴覚障害を持った児童生徒に対してもコミュニケーション能力の向上があったと考えている。

具体的な効果としては、「人の前は恥ずかしい」「音が聞こえないので苦手」と言っていた生徒達が、ボディパーカッション教育後に「いろんな人の前で披露したい」「もっと体を使ってたくさん表現したい。」「人前で演奏するのが楽しくなった。」と言って身体をリズムに同調させて、手やお腹を打ち、足を踏み鳴らし、自分の体を表現手段にする素晴らしさを心から楽しんでいた。このことから、ボディパーカッション教育の自己表現できる力がコミュニケーション能力の向上につながる点から有効性を感じている。そして、ボディパーカッション教育を通してグループで表現方法を考えることはお互いの身振り手振りで意志の疎通が可能になり、即興的表現を友達と一緒に考えたりする中で、体を叩いたりする振動を通して他者と心からの繋がりをもち、心が満足させられる。皆で一緒にリズムを通した自己表現をすることで、より一層一体感が生まれるようである。

平成10年10月、福岡県立久米郷学校の幼稚部から中学部全生徒が、福岡県で行われた全日本聾教育研究大会でボディパーカッション教育の表現発表を行った。生徒達にとって自己実現の場になり、社会参加に対する大きな勇気づけの場になった。さらには、聾学校の生徒の自己表現能力が増し、コミュニケーション能力が高まったと考える。

ボディパーカッション教育の自己表現活動に於いて、踊りなどの他の表現方法と違って体を叩くリズムや振動を通してコミュニケーションを図り、同時に他者のリズムや振動も感じ取っている様子がうかがえる。絡み合うリズム表現の中ではグループでコミュニケーションを行い、振動を感じ、全体でアンサンブルを行うことで自己の所属感を培い、さらには全体の一部となって自己の有用感に繋がっている。このようにして、グループで1つのリズム身体表現を共有することによって、グループ全体のコミュニケーション能力が高まっていくと考えられる。

特に、聾学校の生徒にとっても、健常者と同じように自分の体から音を出し強弱もリズムもわかるし、まわりの人もその動きが見えるので他の生徒と非言語のコミュニケーション活動ができると考えた。さらには、「教師や友人を見る」「他の人の動きを読み取る」「人に合わせる」「人の意図を読み取る」などの視覚等の情報も利用することによりこれらの音を聴覚以外の体性感覚（触圧痛覚等）や深部感覚（振動覚等）により認識し聴覚を補完することができる。このため音楽として生徒間で共有化が成立し、音楽的一体感となり生徒の演奏することに対する内発的欲求効果が高まったと考えられる。

「言語の習得とは、生徒にとって身体全体を巻き込んでなされる営みなのだと表現してかまわないだろう。耳が聞こえないため、言葉を音声によって習得することが不可能と判明しても、聴覚と発声を介しない他の感覚・運動系に依拠したルートが存在することを示した、『手による発語』の研究は、まさにこれを裏づけている。にもかかわらず、いったん自由にあやつれるようになるや、言葉を用いることが理性的な営みであるとみなされるのは、何とも不可思議な現象といえるかもしれない。」と述べている正高信男氏の考えは、筆者自身も同じである。

特に、特別支援教育において、ボディパーカッション教育を考察すると、生徒のコミュニケーション能力を高めるには言葉の力より、非言語コミュニケーション能力が重要である。

6 アンケート結果から見た、特別支援教育におけるボディパーカッション教育の可能性¹²⁾

(1) 研修講座アンケート結果の意義とデータの有効性について

ボディパーカッション教育は通常の学校教育の中で、一般的な教育教材として認知されていないため実際に体験的に研修（ワークショップ形式）を行ったりしていないと理解や認識が難しい内容である。その為、現職の教師がそれぞれの学校種別（小学校、特別支援学校…養護、聾、盲、肢体不自由、中学校、高等学校）の立場から理論・実践方法や実技を含めたボディパーカッション教育を体験する必要がある。そこで、学校種別や教職経験の長短を越えた様々な立場の教師がボディパーカッション教育を研修や経験した上で、その教育効果や可能性について検証できればと考えた。

そこで、平成14年度に行った神奈川県総合教育センター夏季研修講座「体験して学ぶボディパーカッション教育」のアンケート結果を基に、特別支援教育における生徒のコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の有効性について検証してみたいと考えた。そして、この研修会を検証例に挙げた理由は下記の理由からである。

- ア 研修会参加者が345名と対象人数が多く、参加者の年齢分布もアンケート回収結果から20代（14.2%）、30代（26.9%）、40代（38.3%）、50代（16.3%）となっており、全国の教職員年齢構成分布平均と近似しており、全国平均値に近いデータが得られる。
- イ 研修受講者の教職経験年数が1年目から35年目まで、5年区切りで、30名~40名ほぼ均等に参加しているので、経験年数に偏らず「ボディパーカッション教育」に対する教育効果を公平に検証が出来る。
- ウ 参加者の学校種別が小学校、中学校、特別支援学校（養護、聾、盲、肢体不自由）、高等学校と様々な校種の教師から受講希望があり、小中学校・特別支援や高校生までボディパーカッション教育の効果や可能性について検証が出来る。
- エ 文部科学省は特別支援教育推進について『特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである。』¹³⁾と述べている。今回の、神奈川県教育センター「ボディパーカッション教育講座」は特別支援学校（養護、聾、盲、肢体不自由）からの参加者比率が全体の26.1%になっている、このことからボディパーカッション教育の有効性について検証することは、今後の特別支援教育の中での可能性と展望を示していると考えた。
- オ この研修会は、内容も1日研修という充実した内容で、参加者341名に対して、アンケート回答者数が245名であった。結果を分析し回答率等を数値化する場合分母が大きく精度の高い検証が出来るかと判断した。
- カ アンケートの回答方法を無記名・自由提出の形式で行ったので、総合的にボディパーカッション教育に対して現在の教育現場教師の率直な意見が反映されている。
- キ ボディパーカッション教育のハウツー的な短時間の研修ではなく、理論と実践演習・応

用をワークショップ形式（理論研修1単位、実践実技研修2単位、応用研修2単位…1単位90分の計4単位360分）で実施し、基本的な理論・実践・発展的展開ができた講座であった。

(2) 平成14年度神奈川県総合教育センター「ボディパーカッション教育」研修講座アンケート結果

平成14年度神奈川県総合教育センター研修講座アンケート結果

作成責任者 神奈川県教育センター指導主事（安達）

●講座名 「体験して学ぶボディパーカッション教育」

●教師 福岡県久留米市立荒木小学校 教諭 山田 俊之

●募集定員 80名 実質参加人数341名 アンケート回答数 245名（回収率71.8%）

●期 日 平成14年（2003年）8月24日 9:00~16:30

●場 所 神奈川県総合教育センター大講堂・中庭前広場

●実施講座概要

学級活動や授業における生徒のコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の理論と実践演習・応用をワークショップ形式で下記のように行った。（理論研修1単位、実践実技研修2単位、応用研修2単位…1単位90分の計4単位）

ア ボディパーカッション教育の発祥と非言語（ノンバーバル）を含めたキレる生徒のコミュニケーション能力について。（理論講座）

イ 生徒の自尊感情や自己表現能力を育てる、ボディパーカッション教育を取り入れた身体表現と学級活動の実践方法について。（実技演習）

ウ 授業、学級づくり、特別活動、学校行事、全校集会におけるボディパーカッション教育の活用について。（実践事例報告及び実技演習）

エ 養護学校（知的障害、肢体不自由）、聾学校（聴覚障害）におけるボディパーカッション教育の活用について。（実践事例報告及び実技演習）

オ 16グループに分かれて（1グループ約20名）での即興的な創作を通したコミュニケーション活動及びグループ別発表。（応用研修）

●アンケート回答者の所属学校種別

①小学校 157名（64.0%） ②中学校 11名（4.4%） ③高等学校 13名（4.4%）

④特別支援学校（盲学校・聾学校・養護学校…知的障害、肢体不自由） 64名（26.1%）

●参加者経験年数

①1年～5年 40名（16.3%） ②6年～10年 32名（13.1%） ③10年～15年39名（15.9%）

④16年～20年 45名（18.3%） ⑤21年～25年 37名（15.1%） ⑥26年～30年37名（15.1%）

⑦31年～35年 10名（4.1%） ⑧36年～40年 5名（2.0%）

●参加者の年齢層

- ①20歳代：35名（14.2%） ②30歳代：66名（26.9%）
 ③40歳代：94名（38.3%） ④50歳代：40名（16.3%）

●この講座をどのようにして知ったか。（複数回答あり）

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| (1) 学校に掲示されていた「総合教育センター研修講座一覧」を見て | 112名（45.7%） |
| (2) 学校に配布された冊子「研修講座案内」を見て | 96名（39.1%） |
| (3) 各自に配布されたリーフレット「希望制講座案内」を見て | 63名（25.7%） |
| (4) 総合教育センターからの（1）～（3）以外のPR文書を見て | 3名（1.2%） |
| (5) 総合教育センターのインターネットホームページを見て | 1名（0.4%） |
| (6) 管理職等から勧められて | 2名（0.8%） |
| (7) その他 | 6名（2.4%） |

●本研修講座に関する4段階評価

- ①とても良い211名（86.1%） ②良い34名（13.8%）
 ③あまり良くない0名（0%） ④全く良くない0名（0%）

(1) 本研修講座に関する項目別4段階評価の方法は下記の数字で選択する。

1…とても思う 2…少し思う 3…あまり思わない 4…全く思わない

- | | | | | |
|---------------------------------|---------------|---------------|--------------|------------|
| ① 研修・研究意欲を高めることができた。 | 1：206名（84.0%） | 2：27名（11.0%） | 3：1名（0.4%） | 4：3名（1.2%） |
| ② 自己の職務（役割）と責任を改めて自覚することができた。 | 1：108名（44.0%） | 2：85名（34.6%） | 3：39名（15.9%） | 4：2名（0.8%） |
| ③ 最新の（新たな）教育情報を知ることができ、視野が広まった。 | 1：174名（71.0%） | 2：53名（21.6%） | 3：6名（2.4%） | 4：3名（1.2%） |
| ④ 今後の課題と取り組みの方向性を明確にすることができた。 | 1：103名（42.0%） | 2：118名（48.1%） | 3：8名（3.2%） | 4：2名（0.8%） |

(2) 実践的な理論や技術が身に付き、今後の職務に生かせる。

1：174名（71.0%） 2：57名（23.2%） 3：3名（1.2%） 4：3名（1.2%）

(3) 総合的に見て役立つ研修であった。

1：210名（85.7%） 2：33名（13.5%） 3：1名（0.4%） 4：1名（0.4%）

<アンケート回答者の自由筆記部分から特別支援教育及び統合教育に関係する受講者の感想を抜粋>

- ・障害児学級の児童がクラスに通級していて、音楽の授業でできることが少なく悩んでいました。ボディパーカッションはレベルに合わせて誰もが参加できることを知りよかったです。
- ・学年の生徒たち（肢体の高1ですが）は身体をトントンとリズムよくたたくととても喜びます。だからボディパーカッションという名前を聞いて興味をもちました。期待以上にとても楽しかったです。ボディパーカッション部をつくってみんなで楽しめるといいなと思っています。
- ・とても楽しく学習できました。音楽は笛や他の楽器など、技術的なものがウエイトをしめ、楽しめない子がいるのではいつも思っていました。自分の体を使ってのリズム遊びは、幼い頃の遊びのようで、誰でも楽しむ音楽に対して自信ももてるのではないかと思いました。
- ・昨年の5月にインターネットでいろいろ調べましたが、研修はとっくに終わったばかりでした。本も購入して聾の小学部生9人の学年差、リズム運動表現力の差のある子たちに、全く個人差を感じさせない音楽発表会への取り組みをしました。教師側がたくさん引き出しをもっていないと、押しつけたり、叱つたりがっかりしますが、今回のような多くのグループの発表を見ているとこれもあり、あれもありだと心が踊りました。
- ・ボディパーカッションは誰にでもできるというのが素晴らしいなと思いました。楽器の演奏は技能が伴わなければなかなか音楽を楽しめないと思いますが、このアンサンブルはすぐに楽しめそうです。今、小学校1年生の担任をしていて体を使った音を探してみようというのを1学期にやりました。予想もしないような音を探したり、床にバタンと倒れて目立ってみたりと、とても楽しい活動でした。2学期にはぜひアンサンブルもやって生徒たちと一緒に楽しみたいと思います。
- ・今すぐ、どこでも、誰とでも、体一つあればつながりあえる、素敵なワークショップでした。講師の教師のお人柄が、そのアクションからあふれ出ていて、その音や動き、表情で、音楽の質がグーンと高まることを実感しました。また、教師がさかんにおっしゃっていた“相互理解”や“認められること”の大切さは私も常に感じており（養護学校では特にそこを大切にしているのです。）でも、それは学校教育での音楽の役割の原点であることを今日、ここにいらした方々と共有でき嬉しく思います。
- ・年齢や障害に関係なく、人として誰もが音楽に親しむことのできるボディパーカッションはいいと感じました。生活の中でリズムを感じることは、音楽でなくても動作の中でも大切な部分だとも思えます。もっと多くの場面で活用できそうです。クラス（1年生）にもちかえて、生徒たちとリズムを体で楽しめたらと思います。
- ・とても有意義な講座でした。ボディパーカッションのよさって自分の身一つでできることですよ。2学期すぐ生徒たちと実践したいと思います。また「みんなちがってみんないい」「あるがまま」といったよさをぜひ、学級経営に生かしたいと思います。
- ・言葉のない（少ない）児童・生徒にとって、とてもよい手がかりになりました。日本の音楽教育は小

さい時にこんな風に「楽しむ」という要素が取り入れられていないので、音楽ぎらいをつくってしまうのかもしれませんが。大変興味深い活動でした。私は中学校の英語の教師ですが体育祭、学級活動等で参考にさせていただきます。

- ・とても楽しく参加させていただきました。全体指導の中でも、生徒一人ひとりを見落とさない、人としてのやさしさを示していただき、とても嬉しい一日でした。ぜひ、朝の会などでクラスをまとめるため活用したいと思います。大変充実し、いつでも役に立つ実践でした。
- ・音楽大学では教育の合奏の時間で、打楽器の合奏や身体表現などもやりましたが、自分たちが演奏するというので、現場に出てから指導の仕方でもとても悩みました。音楽の苦手な子や障害のある子、いろいろな生徒と楽しく気持ちよく音楽をするには、特にリズム感を養う指導は悩んでいましたが、今日の講座で指導方法のヒントをいただきました。今後、自校の生徒たちに合った内容でやらせていただきたいと思います。(今は養護に移ったのですが2学期はサンバをと思っていたのでどのようにすすめるかと思っていましたが、道がひらけてきました。)

(3) アンケート結果で得られた知見

講座は1日研修（9時~16時）という長時間の研修であった。前半は理論講座を含めた講義・演習を行い、後半は20名前後のグループ別創作活動を行い、参加者相互のコミュニケーション活動プログラムを取り入れた。そのため、一方的に行う講義や演習だけでは得られない、グループ・コミュニケーション活動が行える教材として効果を検証できた。

また、アンケート記入方法が無記名、自由提出という条件で行っていることから、研修会参加者の率直な意見として受け止めることができ、集計結果は、神奈川県総合教育センター（指導主事）が行い公表していることで客観的なデータとなっている。そこで、下記のような知見が得られた。

- (ア) アンケート結果から分析して、この講座を受けた理由が『学校に掲示されていた「総合教育センター研修講座一覧」を見て』と『学校に配布された冊子「研修講座案内」を見て』を合わせると208名(84.8%)になり、夏季休業中の希望選択講座であることを考慮に入れると「ボディパーカッション教育」に対する関心の高さが伺える。
- (イ) 「平成14年度神奈川県教育センター夏季講座」は定員の80名の選択希望講座にもかかわらず、希望者が345名と定員の4倍以上の参加があり、「ボディパーカッション教育」という新しい教育教材に対して現場教師の興味関心が高く、受講後アンケート回答者数は245名と無記名自由提出としてはアンケート回収率が71.8%と高く、ボディパーカッション教育講座に対する好感度も高かったと推測できる。
- (ウ) アンケート回答結果から参加者の学校種別が小学校64.0%、特別支援学校（養護、聾、盲、肢体不自由）26.1%、高等学校4.4%、中学校4.4%になっており、一般の教科別研修会と比べて参加率が高く、特別支援教育の視点からも大変興味関心が高かった。これから共に学ぶ機会が増えてくる「特別支援教育の必要な生徒指導」の観点からも特別支援教育における教育教材

として有効であることが検証できた。

- (エ) 本研修講座に関する4段階の評価では、とても良いが³、211人86.1%、良いが³34人、13.8%で、全体の約98%の教職員が良い以上を回答している。この回答結果を考えると、ボディパーカッション活動は教育関係者に大変高い評価を得られた。
- (オ) 「研修研究意欲を高めることができたか」が約240名近くの教師方。全体で約94%の参加者が意欲を持って取り組むことができたと回答している。また、「最新の教育情報知ることができ視野が広まった。」では、とても思うが³174人、少し思うが³53人と約92%の教師が³、新たな教育情報として受け取っている。このことから、ボディパーカッション教育が³、新しい教育教材として、受け止められていることがわかる。
- (カ) 評価項目で、「実践的な理論や技術が身に付き、今後の職務に生かせる」という欄でも、とても思う174人で71%、少し思うが³57人で約23%とこれも90%を超えている。また、6番の「総合的に見て役立つ研修があったかどうか」という質問に対して、とても思うが³210人、少し思うが、33人。合計226人、全体の99%にあたる。これもほとんどの教職員が³、「役に立つ」という評価をしてくれている。
- (キ) 「あまり役立たなかった」という教師の具体的な意見があり、「小学生を対象にしていたから、中学高校ではやや使いにくかった。」と回答している。教育内容のレベルをもう少し上げて、中学生・高校生でも十分に、楽しめる高度な身体表現活動を求めていたことがわかる。しかし、もう一つの回答は「特殊学級担当しているので、もう少し簡単な内容にして欲しかった。」という理由である。先ほどの小学生を対象にしていたため、レベルが低かったと感じたことと全く逆で、「もう少し簡単なボディパーカッション教えて欲しかった。」という意見で両者相反する意見であるが、参加者の90%以上が、大変役立つ研修であったと答えている。自由筆記の感想文にもあったが、ボディパーカッション教育は誰でも参加でき、満足していたことを証明しているのではないだろうか。
- (ク) 上記の講座の感想にも出ているが、次のような意見が重複していた。(感想本文から)
- ・年齢、障害に関係なく、人としてだれもが、音楽に親しむことができる。
 - ・幼いころの遊びのようで、誰でも楽しめる音楽に対して自信が持てた。
 - ・ボディパーカッションは、障害があっても誰でもできるというのが素晴らしい。
 - ・今すぐ、どこでも、だれとでも体一つあれば繋がり合える。
 - ・相互理解や認められることの大切さを十分発揮できる。
 - ・年代や障害に関係なく、人としてだれもが音楽に親しむことができる。
 - ・みんな違ってみんないい。あるがまま。学級経営に生かしたい。
- 上記内容からも、ボディパーカッション教育が授業や活動を含めた特別支援教育での活用が望まれており、特別支援を必要とする生徒を含めた「生徒のコミュニケーション能力」を培うために非常に良い教材として求められていると考えられる。

7 特別支援教育の発展を視野に入れたボディーパーカッションの展望

学校現場で生徒達同士が身体を使ってリズム活動に取り組み、コミュニケーション能力を高めるボディーパーカッション教育を始めて約20年以上が過ぎた。特別支援教育に「ボディーパーカッション教育」をと考え久留米養護学校に赴任し¹⁴⁾ 10年が過ぎた。特別支援の生徒は、健常者よりも感性がストレートにそして、素直に反応してくれたと思っている。また、生徒同士の活動は、お互いを理解しあうために言葉以上に非言語コミュニケーションが大切な要素になっている。

今までに、様々な小・中学校の教師を対象に研修会等の指導を行ってきた。¹⁵⁾ 具体的には、筆者が経験してきた健常児・知的障害児・聴覚障害児・視覚障害児、不登校施設での実践経験を通し、身体リズムによるコミュニケーション身体活動を楽しむことを伝えてきた。

2005年度中央教育審議会答申では「現在、小・中学校において通常の学級に在籍するLD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒に対する指導及び支援が喫緊の課題となっており、「特別支援教育」においては、特殊教育の対象となっている幼児児童生徒に加え、これらの児童生徒に対しても適切な指導及び必要な支援を行うものである。」と述べている。これからの学校教育における「特別支援教育」の授業は、身体表現活動を取り入れた非言語（ノンバーバル）コミュニケーション活動が重要なポイントになってくるであろう。具体的には、音楽科教育だけに止まらず、学級活動、特別活動、道徳や福祉の分野で生徒同士のコミュニケーション活動として、重要な位置付けになりうると考えている。

筆者の経験から、「特別支援教育」が必要な生徒は、音や振動に対して自然に、そしてその時間を大切に取り組んでいるように思える。生徒同士お互いが言葉よりも身体で表現し、理解しあっている様子は指導している教師にとっても自然な姿であった。具体的には、教師や生徒同士の活動する様子（体の動き）、アイコンタクト、感情表現（affect displays）等でお互いが非言語コミュニケーションを図り信頼関係が増し、生徒同士の関わり合いの中から一つの作品を一緒に仕上げていく。その中で、一体感や、達成感などが得られることが推測できた。生徒自ら目標設定し、健常児、障害児お互いが力を合わせて解決していく力を育てるにはこの非言語コミュニケーションが重要な要素になっていると考える。

聾学校（聴覚障害）の生徒も手を叩き、足を鳴らし、振動を感じながらリズムに乗って楽しそうに体を揺する姿が数多く見られた。また、広汎性発達障害（自閉症）の生徒がボディーパーカッション教育を取り入れた場合、リズムが他の生徒と合わなくても、視覚から入る周りの生徒達の動きや振動を感じることで興味を示し楽しむという心理的な効果も表れている。さらには、生徒達は仲間と同じ様にリズムを合わせていくと心地よいリズムの同調が持つ不思議な力を感じている。ボディーパーカッション教育における身体表現活動は、養護学校・聾学校の生徒が、予想以上に取り組んでくれた。

しかし、今回の実践を省察してみると次のような3点で限界が見られた。1点目は特別支援教育の中でのコミュニケーション能力の定義である。障害の種別が自閉症、広汎性発達障害、学習障害、

注意欠陥多動性障害、ダウン症、脳性まひ、軽度発達障害などの多様な場合や、障害の軽重が異なっている場合に、個々の生徒の自己表現力が増し、積極的に取り組む姿勢が何を基準に生徒のコミュニケーション能力向上と言えるのか判断が難しい。2点目は、聾学校（聴覚障害）の生徒においてコミュニケーション能力とは何か、体で表現できる力が手話などのコミュニケーション手段とどのような関連がありコミュニケーション能力向上につながっているのか明確な判断できない。3点目は生徒のコミュニケーション能力が、実践事例2で軽度発達障害A子のコミュニケーション能力が向上した基準が、一般の健常な生徒と同じ基準でコミュニケーション能力向上として捉えることが可能であるか大変難しい。以上3点が明確にならないまま、実践事例が情緒的な考察に終わっていることが大きな反省である。今後は、特別支援教育における生徒のコミュニケーション能力の定義について、明確な視点や判断基準を持って検証できるよう研究手法を再検討し、ボディパーカッション教育の展望につないでいきたい。

<注>

- (1) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課『「特別支援教育支援員」を活用するために』文部科学省、2007年、p12。
- (2) 大宮 登「コミュニケーション能力への関心」『中央教育審議会 生涯学習分科会 家庭・地域の教育力向上に関する特別委員会（第3回）議事録・配付資料』、2006年。
- (3) 八尾坂修『巻頭言 現行学習指導要領の理念と学習指導要領改訂の視座 2.改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂の視座(2) 教育内容に関する主な改善事項③各教科における言語活動の充実』九州教育経営学会研究紀要、2008年、p5。
- (4) マジョリー・F・ヴァーガス 石丸正訳『ノンバーバル・コミュニケーション』新潮選書、1998年、p15。
- (5) 文部科学省『特別支援教育推進について（通知）』特別支援教育の理念より、2007年。
- (6) 特別支援教育に関する中央教育審議会答申『特別支援教育に関する中央教育審議会答申「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」より』、2005年。
- (7) 八尾坂修『21世紀における教員養成の充実に向けた大学の確約』、2006年。
- (8) 前掲通知（注）5より。
- (9) この実践は、筆者が1996年に久留米市立久留米養護学校に赴任した年に高等部の生徒を対象に行ったものである。
- (10) ボディパーカッション曲「花火」は、筆者が平成2年に小学校4年生を対象に筆者が作曲した曲である。4小節の簡単なリズムパターンを繰り返すために、養護学校の生徒に対しても指導しやすく、さらには参加者全員が同じ内容に取り組める教材から選択した。山田俊之ボディパーカッション曲「花火」『平成17年度文部科学省検定済小学校3年生音楽科教科書【音楽のおくりもの】』教育出版、2005年、p52。

- (11) この奏法は、カノン形式と呼ばれて、同じ演奏内容を繰り返し追いかける演奏方法である。養護学校の生徒には大変取り組みやすい形式と考えてこの形式を選択した。
- (12) 平成14年度神奈川県総合教育センター「ボディパーカッション教育」研修講座アンケート。本アンケート結果を採用したのは、今までの研修会での参加者人数が一番多く、幅広い学校種別と年齢層からの参加があったため全国平均値としてのデータが得られると推測した。
- (13) 前掲 注5より。
- (14) 筆者は小学校で担任15年（教務主任2年）経験した後、1996年（平成8年）久留米市立久留米養護学校（知的障害）に赴任し、高等部3年、教育相談を2年経験した。その後、平成13年より久留米市内の小学校に戻り4年間学級担任を経験した後、再び2005年（平成17年）より久留米市立久留米養護学校で2年間小学部、高等部の指導を行う。
- (15) 2000年以降、教育関係者を対象に「ボディパーカッション教育」研修会を年間平均約20回、受講者累計の数が全国で約15,000人（学校数約8,000校以上）になる。

<参考文献>

- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課『「特別支援教育支援員」を活用するため』、2007年。
特別支援教育に関する中央教育審議会答申『「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」より』、2005年。
- 八尾坂修『学校改善マネジメントと教師の力量形成』第1法規株式会社、2005年。
八尾坂修『アメリカ合衆国教員免許制度の研究』風間書房、1998年。
T・E・デール、K・D・ピーターソン著 中留武昭・加治佐哲也・八尾坂修訳『学校文化を創るスクールリーダー』風間書房、2002年。
- 八尾坂修編著『これからの学校と評価力の向上』教育開発研究所、2006年。
山田俊之『子どものコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の効果に関する基礎的研究』（九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門平成19年度「社会人支援研究助成」報告書）、2008年。
- 山田俊之『ボディパーカッション入門』音楽之友社、2000年。
正高信男『子どもはことばをからだで覚える』中公新書、2001年。
国立教育政策研究所生徒指導研究センター『生徒指導資料第一集』国立教育政策研究所、2004年。
山田俊之『子どものコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の可能性』九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻修士論文、2007年。
山田俊之「体を楽器にしちゃおうボディパーカッション：小三教育技術10月号増刊『ゲーム遊び&お話し集』小学館、2008年、pp58-64。
- 露口健司「学校組織における教師効力感の研究－チーム効力感の効果を中心に」『九州教育経営学会研究紀要』、2008年、pp65-73。

山田 俊之

斎藤 孝『コミュニケーション力』岩波新書，2004年。

ジョン・デューイ 市村尚久訳『経験と教育』講談社学術文庫，2004年。

国立教育政策研究所「児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査」文部科学省，2006年。

マジョリー・F・ヴァーガス 石丸正訳 1987年『非言語（ノンバーバル）コミュニケーション』新潮選書，2003年。

橋本良明編著『コミュニケーション学への招待』大修館書店，1997年。

山田俊之『楽しいボディパーカッション①リズムで遊ぼう』音楽之友社，2001年。

山田俊之『楽しいボディパーカッション③リズムで発表会』音楽之友社，2004年。

有田秀穂『セロトニン欠乏脳 キレル脳・鬱の脳を鍛え直す』日本放送出版協会，2003年。

内山登紀夫監修 諏訪利明、安部陽子編『発達と障害を考える本①自閉症』ミネルヴァ書房，2006年。

内山登紀夫監修 LD協会編『発達と障害を考える本③LD（学習障害）』ミネルヴァ書房，2006年。

内山登紀夫監修 えじそんくらぶ・高山恵子編「発達と障害を考える本④ADHD（注意欠陥他動性障害）」ミネルヴァ書房，2006年。

A Perspective for BODY PERCUSSION EDUCATIONAL PROGRAM to Improve Pupil's Communication Abilities a clue for special education -

Toshiyuki YAMADA

In “special education,” pupils with various needs of support encounter many occasions to be put together for education in the same classroom. The imminent educational issue is: How can we improve the communication abilities of the pupils with different personalities, who have or who don't have disabilities, so that they will be able to construct a society of co-existence?

With that in mind, I would like to verify the effectiveness of the Body Percussion Education(Rhythmic Physical Performances)as an enjoyable and educational communication method in special education (education in schools for with hearing difficulties and in schools for physically handicapped or mentally challenged children). I would like to prove its effectiveness among all kinds of pupils including those with normal healthy bodies. The body percussion education started when I, as a primary school teacher, suggested a class activity that would bring a pupil who had trouble making friends with other pupils to the center. It was intended to improve their communication abilities.

What kind of communication abilities do the pupils have? They include the abilities to convey one's feelings not only in voiced or written words but also in expressions of the face, in the tones of the voice, in gestures and movements of the body. The concrete elements in this activity includes, in addition to voicing words, clapping hands, beating one's stomach, hitting the knee, stomping one's feet, jumping, beating one's hips. Beating one's various parts of the body and making sounds and movements becomes a expression that can be performed together in groups and with all members of the activity. Improvised ensemble(various combinations of physical expression)can be coordinated. These are done in the body percussion activity.

Mr. Osamu Yaosaka, member of the Central Education Deliberative Council and professor at Kyushu University, has stated “Considering communication, sensitivity and emotion,(pupils)convey their messages to others through physical expressions(ex. body percussion),” and considers body percussion as a physical expression that enhances communication abilities.

In considering this subject with special education, first, I would like to write about the importance of nonverbal communication in special education. Then, I would like to make a report about my 10 years of experience in this activity, with two cases of at special education schools(schools for the mentally or physically challenged)and a school for pupils having hearing difficulties), in order to provide body percussion education as a clue to enhance communication abilities of pupils.